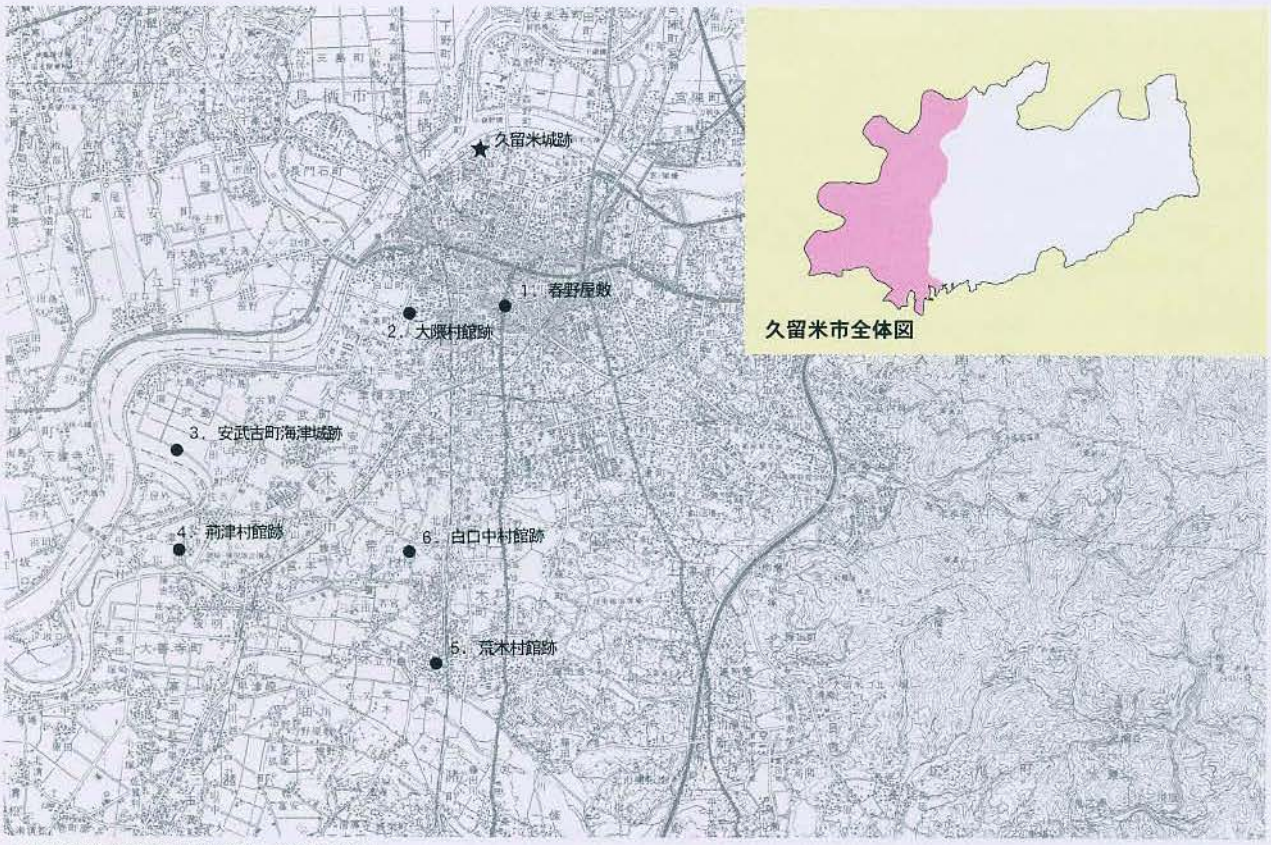
歴史散歩

れきしさんぽ No15

『筑後将士軍談』に見える城と館（1）

■矢野一貞と城館■

江戸時代末に活躍した久留米藩士の矢野一貞は、筑後地方の歴史をまとめた書物である『筑後将士軍談』（全60巻）を書き残しています。その中の45・46巻には「城館」に関する記述があり、主に鎌倉時代から戦国時代に至る中世の城館171箇所についてまとめています。今回は『筑後将士軍談』に登場する城館のうち、久留米市南西部の城館について紹介していきたいと思います。ところで現在の久留米市南西部は、江戸時代には「三潴郡」と呼ばれていた地域に相当します。『筑後将士軍談』には三潴郡内に所在する27箇所の城館の名が記されており、この内、現在の久留米市内にあった城館としては７箇所の名前が見られます。なお、久留米城跡に関しては、本シリーズ『歴史散歩』No.12で詳しく紹介されていますので、ここでは省略します。



▲久留米市南西部の城館（1／100,000）

■館と城■

さて、『筑後将士軍談』「城館」の項目の中には、「〇〇城跡」や「〇〇館跡」といった記載があります。複数の呼称があるということは、これらの用語が区別して使われていたことを示しています。ではそれぞれの呼び名はどのように違うのでしょうか？

館……かん・たち・やかたなどと呼ばれ、ちょっと難しい表現では「居館」といいます。生活居住を目的としますが、土塁や堀(濠)など、防禦のための施設も備えています。これは単に居住のみを目的とした「屋敷」とは大きく異なります。ちなみに戦国時代、甲斐国(今の山梨県)の武将であった武田信玄は、自分の領内に城を築かなかったことで知られています。信玄は城ではなく、「躑躅ヶ崎館」と呼ばれる、「館」を拠点として活動していました。

城……正確には「城郭」と呼ばれます。ところで皆さんは「城」という言葉からどのような建築物を連想するでしょうか？おそらく姫路城や大阪城のように立派な天守閣・堀・石垣などが整った「お城」を真っ先に想い浮かべることと思います。しかし南北朝期以降に山間部などの天険の地形を利用して築かれた「山城」は少し違います。山城は敵を見下ろせる山頂や丘陵の先端部などの頂部を削って平坦に仕上げ、そこには土塁や空堀、曲輪などが築かれました。一方、平地に築かれた「平城」は、周囲を深い堀で囲んだり、クリークを利用して敵の攻撃に備えた城も見られます。このように城は防禦施設としてのみ利用される要塞であり、居住施設でもある館とは異なります。

この他、本格的な防禦施設に加え、居住施設も備えた城館のことを、**館城**(かんじょう・やかたじろ)と呼ぶことがあります。

■身近な城と館■

ここでは久留米市南西部に伝わる城館について紹介しますが、残念なことに今となっては正確な所在地が分からない城館もあります。そこで発掘調査などにより、詳しい情報や出土品などが分かっている城館については少し詳しく見ていきたいと思います。

1．春野屋敷(原古賀町)

江戸時代までは堀の跡が残っていたようで、平安時代の終わり頃に春野長左衛門なる人物によって築かれて以来、長年に及んで代々続いた屋敷跡です。現在の正確な所在地は不明ですが、地名に名残りの見られる原古賀町辺りにあったようです。

2．大隈村館跡(梅満町)

大隈左近将監の居城と伝えられる城跡で、現在の梅満天満宮付近にありました。城の東方には「構へ口」註1があり、そこから文政七年(1824)に建物の礎石3個が掘り出されたことが記されています。また城の周辺には30軒ほどの家があり、すべて「中原」姓を名乗っていることも記されています。この中原氏の祖先は、肥後国(今の熊本県)中原村の出身と云われています。

▲現在の梅満天満宮

3．安武古町海津城跡(安武町住吉)

安武安房守の居城と伝えられます。海津城跡は平成3年度に発掘調査が行われ、クリークに囲まれた平城であったことが分かりました。調査では建物跡や井戸、ごみ捨て穴などが発見され、日常の生活に用いた土鍋やすり鉢、皿、石臼、中国産の陶磁器、備前焼や、家の壁土などが出土しています。今まで伝承や古記録などでしか知られてい

△発掘作業の様子

▲調査成果を元に海津城の周囲を復元

▲出土した食器類

▲現在の海津城跡

なかった海津城の実態が、私たちの目の前にちょっとだけ姿を現わした瞬間でもありました。

さて、海津城は戦国時代、豊後の大友氏の配下にあった安武氏によって永正五年(1508)に築かれ、天正四年(1576)に筑後川を挟んで対峙(たいじ)する肥前の龍造寺(りゅうぞうじ)軍の攻撃にあって落城に追い込まれ、江戸時代の初めには廃城(はいじょう)になったと伝えられます。およそ100年間にわたって戦乱のシンボルでもあった海津城の名前は、昨年、創立100周年を迎えた安武小学校の校歌にも歌われています。

4．荊津村館跡(おどろつむらやかたあと)（大善寺町中津）

荊津村館跡については、矢野一貞も詳しくは記していません。荊津伊賀守(いがのかみ)の館跡と伝えられ、館は藤吉村の幸市なる人物の居宅に近い観音堂付近にあったようです。また「鶴崎」姓（現在は津留崎）を名乗る人々の祖先にもあたると記しています。

さて、平成元年～４年度にかけて、荊津村館跡の一部で発掘調査が行われ、その結果、屋敷を取り囲むと考えられる幅４m、深さ約1.6mもの大きな堀跡が確認されました。堀の中からは中国から輸入された陶磁器や銭貨（お金）をはじめ、たくさんの土器が出土しています。

△発掘調査で見つかった荊津村館の堀（左）。堀の中からはたくさんの土器が出てきました（右）

5．荒木村館跡（荒木町荒木）

近藤備後守の居館と伝えられます。文献には鎌倉時代の御家人として古くから「荒木氏」の名前が登場しますが、やがて時代が下るにつれて「近藤氏」の名が見られるようになります。矢野一貞は近江国（今の滋賀県）より来た近藤氏が、荒木氏の家を引き継いだと記していますが、詳しいことは分かりません。この荒木・近藤氏に関しては、系図や所領などについて書かれた「荒木近藤文書」註2も伝わっており、貴重な資料となっています。また昭和62年度には屋敷地の一角で発掘調査が行われ、残念ながら建物跡などは確認されませんでしたが、当時に使われていた土器などが出土しています。

▲土器が出土した様子

6．白口中村館跡（荒木町白口）

『筑後将士軍談』には次のように記されています。

「川ノ南ニアリ、一木但馬守ノ館跡ト云、廣凡二反計、三方ニ堀アリ、北ニ黒門ト號スル地アリ、馬場、蔵跡ナト云字モアリ、時代不詳、今一村皆一木氏也……」

▲白口中村館跡周辺の字図

とても短い記述ですが、一木但馬守なる武将が当地でかなりの勢力を奮っていたことが分かります。残念なことに館が存在していた詳しい時代は分かっていませんが、三方を堀で囲まれた、広さ二反（＝600坪＝約2,000㎡）註3にも及ぶ広い敷地があったようです。現在も上津荒木川の南側には「一木」姓を名乗る方が多く住まわれており、また周辺には「中屋敷」「西屋敷」「垣ノ内」といった字名があることから、この付近にあったものと考えられます。

■おわりに■

矢野一貞は『筑後将士軍談』中に171にも及ぶ城館の名を書き残しました。これは当時の城館を学ぶための貴重な資料であると同時に、幾多の戦乱によって大地に刻まれた、人々の悲しみの痕跡でもあります。また、矢野一貞が記していない、記録として残っていない城館も、市内にはまだ眠っている可能性があります。

人類の長い歴史の中で、身を守るために大掛かりな「防禦」を必要としたのはごく最近のことです。私たちの暮らしの中から「防禦」を必要としなくなる時代が早く来て欲しいものです。

註1　「構へ口」は、防禦のための施設などを兼ね備えた城への出入り口にあたる

註2　『久留米市史』第7巻を参照。

註3　白口中村館跡があったと思われる当時は「1反＝360坪」であったが、太閤検地以降に「1反＝300坪」となった。よって矢野一貞が『筑後将士軍談』を記した当時はこの程度の面積と考えられる。

◆ 歴史散歩 No15 ◆
平成14年3月31日
発　行　久留米市教育委員会
〒830-8520 久留米市城南町15-3
教育文化部文化財保護課　0942-30-9225
久留米市埋蔵文化財センター　0942-34-4995
久留米文化財収蔵館　0942-38-6194